

シューマン：交響曲第2番八長調 Op.61（マーラー編曲版）

空想上の分身、フロレスタンとオイセビウスの筆名で評論を書いたり、幻想曲のように夢想とファンタジーにあふれる作品を数多く書くなど、ロベルト・シューマン(1810-1856)は最もロマン主義的な感性をもった作曲家のイメージが強いが、シューマンの音楽が古典的な技法に支えられていることも見逃してはならないだろう。

1840年、30歳の時にクララ・ヴィークと結婚、その翌年には《交響曲第1番》を初演したシューマンだったが、精神の不調から、1844年暮に住み慣れたライプツィヒを離れ、新天地ドレスデンに活動の拠点を移した。この地でシューマンはクララとともに、バッハの作品を研究しながらフーガなどの対位法を学び直した。シューマン自身が「フーガの年」と呼んだ1845年に《交響曲第2番》は書き始められ、翌1846年に完成、メンデルスゾーン指揮、ゲヴァントハウス管弦楽団によって初演された。

対位法はバロック音楽に限られたものと思われがちだが、古典派やロマン派の音楽にも欠かせない技法である。たとえば、主旋律と対旋律、あるいは内声部を奏するオーケストラの各パートの線と線を、どのように絡ませながら流れを作り出していくかを構想する際に、対位法の深い知識が生きてくる。《交響曲第2番》にもいたるところにその成果がみられる。

また、シューマンにとってベートーヴェンとシューベルトの交響曲は最も近い古典であった。とくにシューマン自身が楽譜を発見したことで有名なシューベルトの《交響曲八長調（「グレイト」）》の演奏を直前に聴いたことは大きな刺激となり、調も同じ八長調で書いている。古典と深く結びついた交響曲の創作を通じて、シューマンは精神の危機から立ち直ることができた。

なお、今回演奏されるグスタフ・マーラー（1860-1911）による編曲版は、指揮者としてこの交響曲を指揮した経験があるマーラーが、シューマンの意図を汲みながらオーケストラの効果を補強したり、より簡潔な表現をめざして手を加えたりしたものである。

第1楽章：ソステヌート・アッサイ、4分の6拍子～アレグロ・マ・ノン・トロポ、4分の3拍子、八長調、ソナタ形式。「ド・ソ」の5度音程を基本とする雄大な序奏から、付点リズムを特徴とする躍動的な主部へと進む。

第2楽章：スケルツォ、アレグロ・ヴィヴァーチェ、八長調。切迫したスケルツォ主部に、2つのトリオがはさまれている。

第3楽章：アダージョ・エスプレッシヴォ、八短調、4分の2拍子。主題の頭がバッハの《音楽の捧げ物》のトリオ・ソナタに似た、表情豊かな緩徐楽章。

第4楽章：アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ、八長調、2分の2拍子。楽章後半では、賛歌のようなおおらかな主題と第1楽章序奏の5度音程の主題などがみごとに組み合わせられ、音楽は大きく高揚していく。

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

※スコア上の表記